

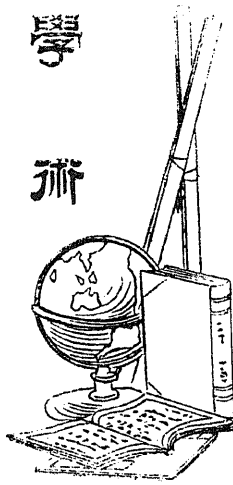
り。

十九日在郷重人の演習を見物に連れ行きたり

ひとへなる蟬の羽衣夏は猶

うすしといへどあつくぞありける

學 術



夏の海邊

東海生

海岸のひろくとした處の、波靜に白砂を洗ふ
磯のほとりて、散歩するのは、實に愉快である。

殊に夏の海岸と來ては、又一層である。海岸は山
手の方や町中よりも、餘程涼しくつて空氣が清潔
であるのだから、身體の爲になることは、非常な
もんだ。夏を海岸で暮す丈でも、この様である
が、此上毎日二三度も海水浴をやるものなら、御
飯のいけることは、常の二倍にもなり、身體の色
は、赤黒になつて、丁度、船頭の子供を見た様に
なる。

身體の色の黒くなるのは、衛生上大變にいゝの
である。例合ていへば、家の中とか、木蔭に生長
する草は、青白い、なよ／＼した形をして居るに、
日わたりのよい所に生えてる草は、丈夫で黒青い
色をしてると同じことである。

夫から氣分がさわやかになつてくる。これまで
東京のような、家の密にこみあつてる、塵芥だら

けて、時々變な臭氣がやつて來る様な處に居つて
 絶えず、頭痛がしたり、脚氣に苦しんだ様な人で
 も、海邊へ來て、磯の波に足をぬらしながら、親
 友三四人とはるかのあなたを眺ては、四方山の咄
 をし、或は貝を拾ひながら、散歩すれば、どんな
 病氣もよくならぬことはないといつてよい。

海岸に居つて、時々海の方を眺めて居ると、時
 々海の水面の色が變つてくる。天氣のよい日の夕
 方、西の方に、少し雲のあるときは、海の水は眞
 紅になつて丁度赤インキを流した様である。けれ
 ども天がかき曇つて、今にも夕立の來そうな時に
 なると、海水は一面に灰色になる。また大風雨が
 わつて、まだ天も晴れない時は、大波が起るので
 海の底までもかき廻すから、全體が眞黒に墨を流
 した様になる。それに引き代へ、天氣清明にして

一點の雲なく、日本晴ともいふべき時であつて、
 海の水が澄み渡つた時は、眞青であつて、丁度夏
 の朝田甫の間にある稲葉の青々と露をもつてゐる
 のによく似てゐる。

この外海の中には、小さな動物や植物があるた
 めに紅色、褐色、黄色などを呈することがある、
 こんなに海の水は時と所とに依つて、色を變ずる
 が別段海の水の色が變るのではない、海の水は透
 明で無色である。唯其の中に色々の難り物がある
 とか、其上にある雲が色々な色を呈するとかで、
 何でも變るのは、丁度白紙は其元を尋ねればまっ
 白であるが、其上に塗るもの、色に依つて如何で
 も變り、又人の心は始は、清淨潔白で、海水の透
 明なるが如くに、白紙の純白なるがごとくである
 が、種々な人と交際するにつけて種々に變じて悪

人ともなり、善人ともなると同様である。

近頃の暑さでは、朝夕の海邊散歩は愉快であるが、日中は餘程苦しくて散歩も出来ない。此時こそは、海水浴に適當した時である。砂はやけ、草の葉も亦燃ゆる許りの時に、衣服を木蔭にぬぎ捨て、青々した海へ飛び込めば、これは又別世界である、其愉快は又格段である。はね廻り、飛び泳ぎ、くぐり抜けなど又得がたい樂である、遠く海岸を離れて、群を抜き、獨り碧海の面に浮び、得意然として泳いで居るのも、うらやましい位である。されども、獨り得意顔で、あんまり遠くへ出かけることは、慎まねばならぬ。といふのは、如何に游泳の達者でも、海の底から、足を引張るものがあつて、まことに危険い。それは何かと云ふと、いろ／＼の海藻とか、くらげなどである。

海に在る海藻の種類は、大變なもので、其大さもいろ／＼ある。小いのは肉眼で見えない位のものがあつて、大きいものになると、何十間といふ長いものがある、この長いのが泳いでいる人の足に、まきついで、遂には其人を溺れさせることがある。海藻は三十間もあるが、之を陸地にある植物に比べて見ると、大變風白いことが知れる。

海藻は、人間でいへば、丁度骨なし子や、提灯兒を見た様なものである、體に少も骨がない、即かたい確した所がない。夫で波のまに／＼西へも東へも動揺するから、折れる心配は少もいらぬ、もし海藻が陸上の植物の様に、確していたものならば、暴風雨の時などは、ペリ／＼折れてとても安々と生活することができず、常に波のこと許りを心配していなければならぬ。幸なことには、造

物者がそれ／＼甘く適當に造つてくだされたので
海の中の植物も、無事に生長することが得られる

陸上の植物は、

骨なし子ではならぬ。

しつかりして

いなければならぬ

丁度骨なし子が、

立ち得ない様に海

藻を陸地に植えた

らば、大變ですぐ

へコタレて枯れて

しまさるのである。

であるから、陸地

の植物には、組織の内に、こゝかしこに堅い所が

あつて、心棒をなして居るので、少々な風なんか

には、容易にへコタレルことはない。

こんなに水の中に在ると、陸上にあるのとて

構造が違つてゐる處

が面白い。こんな

異點も植物ばかり

ではない、動物に

迄も見ることが出

来る。海にすんで

居る、いか、たこ

ふか、などはなよ

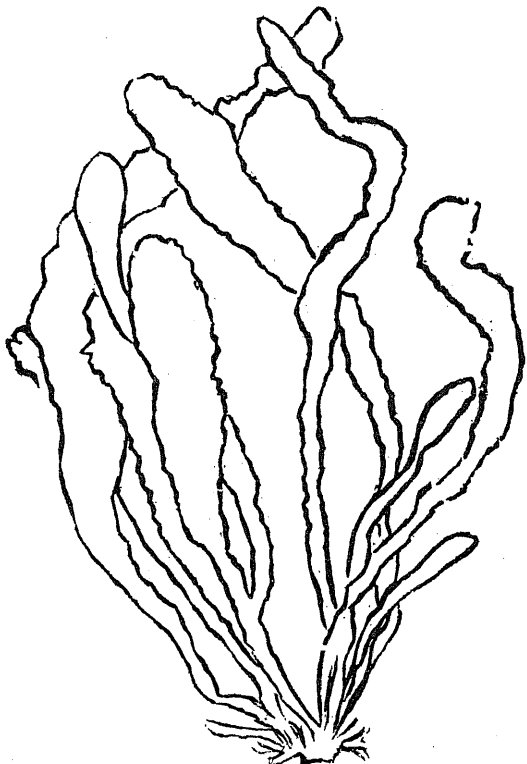
／＼して居るけれ

ども、陸にある猫

や鼠などは、堅い

骨を以て居て確している。

ぐらげの様な少なものがどうして、人の足を引



海藻の圖

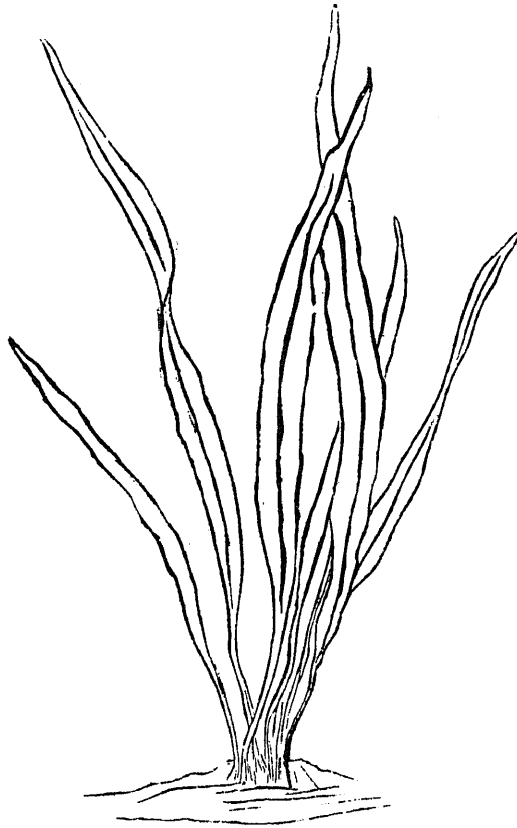
ばるかといふに、くらげは別に引つばる手は持つて居ないが、一種特別な奇妙な仕方て人を困らすことができる。

くらげには、

いろ／＼種類があるもので、其形も色々である、

次の圖は、最普通のくらげであるが、上の方の平たいのが身體で、海に泳いでるのを見ると、

丁度雨傘の様である、して、其下にあるたこの足見た様なものが、くらげの足である。この足が大



層こわいもので、人なんかでもこれがために困らせることがある。なぜこんな小さなびら／＼した足

から人の様な大きなものが困らせられるのであらうか、一寸考

へて見ると不審で堪らない。人間もこゝに至ると、餘りえらく

がない、くらげが夫丈の仕掛けを以て居るのだから、こゝが造物者のえらい所である、もしか

ない様になつてくる。然し、之はどうも致しかた

が大きな動物に抵抗することが出来なかつたら、

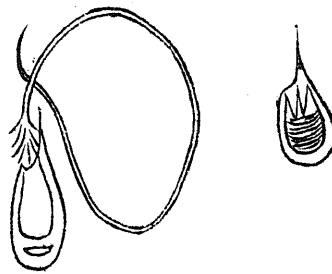


くらげ

いつも、他の魚類などから苛められて、とても此世に生活することは、六かしいかも知れぬ。造物者はそれらを生活せしむるため、いろく々な仕掛で敵をこわがらせる様にしてている。

くらげの足を小さく切つて、顕微鏡といつて、物を百倍にも千倍にも、大きくして見へる器械で

見ると、其小さな足の内に、次の様な小さな袋がある、其袋の一方には、針のような突起ありて、人間だの他の動物が、くらげに觸れると袋の



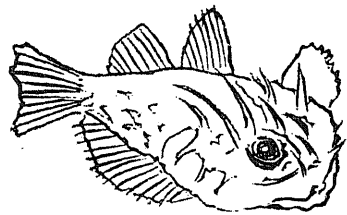
糸 細 胞

しくつて痛を感じる。その上、針の根元の所に逆とげがあるので、容易に除かれないから、尚一層長く痛みを感じる。よく海水浴の時に、何だか知らぬが刺されて痛を感じて、苦しいことのあるのは、こんな針を持つてゐるものに刺さるゝからで

針の所が破れて、その中から長い針が出て、それと同時に袋の中から、液汁が出て、これが敵の體中にさし入るのであるが、これが大變に苦

ある。人間の様なものにも尙痛を感じることに此の如きであるから、まして小さな動物は中々たまらない、吾々が毒蛇にかまれた様だろうと思ふ。くらげがこんな針を以つて居るのは、敵を防ぐ爲許りでない。自分の餌となる小動物を殺して食べるのに役だつ。それは、どうするかといふと、まづ小さな動物が、くらげの足の近邊へ來ると、例の針で殺して、足をきり／＼曲げてこれを擒にし、しまつて、すぐ口の中に入れて食べてしまふ。此くのごとく、敵を防ぐと同時に、食物を得るための仕掛は、其他の動物にも、往々見ることが出来る。

おこぜといふ魚を見たことがあるでしょうが、あのおこぜの鱗から、堅い鋭く尖つた針の如き骨がで、居る。おこぜの怒つた時は、この針を振り



廻すので大へんこわい。時とするとき針にさされて死ぬることがあるから舟人は普通の魚類の内では、一番こわがるもので、網にかつても大低はあふないから捨て、しまふ。

又めくらうなぎといふ魚がある。これは舟人の最悪むもので、網にかつたのは皆すて、仕舞ふ。何故といふに、この魚の體から、ねば／＼するものが澤山で、くるるのであるから、もし籠などに入れたものなら、籠全體がねば／＼して、とても用に立たないようになつてしまふので、誰れもこれを取るものがない。であるから、めくらうなぎの一族は、敵に取られる心配がなくなつて、安心

して繁殖はんしよくすることができさる。

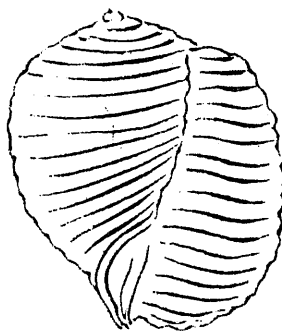
又またあるものは、いやな嗅氣しゅうきをもつて居るので、誰たれもこれを取とらないから安心あんしんして居る。

又貝類またいれいや、よろい魚、龜、人手にんてなどの如ごとく、體たの外部ぐわいぶに堅かたい被おほひ物を以もつて居るものは、如何いかに強き敵てきがやつて來きても、堅かたい被おほひ物ものの中に隠かくれるのだから、平氣へいきの平左衛門へいざゑもんで威張いばつて居ることが出來る。

けれども鴉からすには此貝このかいも困こまつたといふ話はなしがある。

ある時鴉ときからすが空からから、不意ふいにやつて來て、貝かいを食くほうとすると、貝かいは心得こころぬたりと直すぐに首くびを殻からの中に引ひつ込こめました。で、鴉からすは貝かいをおどかしたり、おだてたり、すかしたりして種々いろいろに手てを盡つくくして見みたれども、殻からがかたいのでなんとも仕方しかたがない。で鴉からすはいかにも、殘念だんねんと思おもつて血眼ちまなこになつて考かんえたが、何か思おもひついたと見え、不意ふいに立たち上あり、

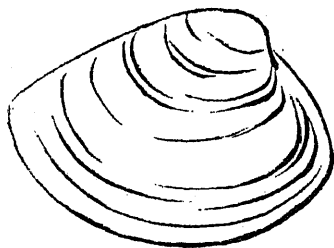
貝かいをくわへて高たかく中天ちゅうてんに昇のぼりたる頃ころ、ビューツと



いがらづら



ひだらこ



はまぐり

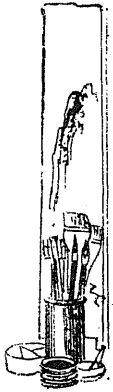
貝かいを投なげ落おしたので、貝かいは風かぜを切きつて海岸かいがんの石いしの上うへへ、パチーンと落おちたので、さしもの堅かたい殻からも

粉なみぢんになつて遂に鴉の食物となつたといふ話がある。

何でもこの様に知識といふものが必要である。知識さへあれば、今まで害になつたものでも却つて有益になすことができる。

貝を食べやうと思つて、中の肉を引き出さうと思ふと、貝は縮上んで中々出てこない。けれども一寸考を廻らして鍋にかけて煮ると、苦もなくポロポロと離れてくる。(未完)

川音につれて啼き出す河鹿かな



兒童研究法

文學士 松本孝次郎講演

視覺の研究 上 注意すべきこと

之はブライエル氏の觀察の順序に由て申しませう
(イ) 光を感ずること 暗き室内に睡れる小兒は若し燭光が其顔面に近づく時は醒むるか或は醒むることなくして眼瞼を固く閉づるか。幼兒の瞳孔は眼を被ふて光線を遮るものある時は擴大となるか、室内を忽然暗黒にする時は不快の狀を呈するか。或

